

応用認知言語学的な日本語教育の試み

森 山 新

(お茶の水女子大学)

moriyama.shin@ocha.ac.jp

1. はじめに

日本語を学習する際に難しい項目の中に、授受表現、受身表現などがある。これらは視点が関わるヴォイス表現であり、他の言語でも習得が難しい項目であるが、日本語の場合には、他の言語には見られない独特の側面があるため、習得をさらに困難なものにしている。例えば以下のようなものである。

(1) 授受表現

英語、韓国語など、多くの言語で授受動詞は、give-receive の 2 項対立型が普通である（中国語では 1 項型である。後掲の表 1 参照）。日本語ではサシアゲル・クダサル・イタダクなどの敬語動詞を除外してもアゲル（ヤル）・クレル・モラウの 3 項対立になっている。日本語学習者にとっては、なぜ give をアゲル・クレルと使い分けなければならないか理解できず、さらにそれらを知識として学習できたとしても、運用において使い分けられるようになる（自動化する）のは容易ではない。

この点に関してはこれまで、日本語の場合 give-receive の 2 項対立に加え、「ウチーソトの区別」が作用するからであると説明されてきた。これは説明としては妥当である。しかしもしそうであるなら、日本語はなにゆえにそれを区別するようになったのか、また「ウチーソトの区別」をするなら、「give-receive の 2 項×ウチーソトの 2 項＝4 項対立」となるはずで、receive にも「ウチーソトの区別」があってもよさそうであるが、こちらはウチーソトの区別が存在せず、結局 3 項対立となるのはなぜか。このような学習者の疑問にどう答えたらよいであろうか。

(2) 談話における固定的視点

日本語では他の言語に比べて、談話において視点を固定する傾向が強い。固定視点をとらないがゆえに、日本語能力が向上しても彼らが書いた作文や表出した談話が理解しにくいことがある。例えば田代（1995）では、日本語話者の文章は主人公となる人物の視座から述べられることが多いのに対し、中国語や韓国語を母語とする学習者はそうでないため、日本語話者が読むと違和感を感じると述べられており、また渡辺（1996）では日本語話者の視点が主人公寄りの視点で述べられる傾向があるのに対し、学習者はその傾向が日本語話者よりも弱いこと、韓国語を母語とする日本語学習者は主人公よりの視点傾向は弱まるものの比較的日本語話者に近いが、中国語、ドイツ語を母語とする学習者は中立視点で述べられる傾向が強いことを指摘している。また金（2001）では、日本語話者は特定の人物を主語に据える傾向があるのに対し、韓国語話者は動作主を主語に据える傾向があること、これは母語である韓国語からの視点的干渉であることを実験的に示している。日本語以外の言語も不必要には視点を移動させないのは当然であろうが、日本語の場合に特に固定視点の傾向が強いのはなぜであろうか。

(3) 行く・来る

行く・来るはヴォイス表現ではないが、視点が関わっているため授受表現などと並べて議論されることが多い。日本語の「行く・来る」に相当する英語は「go・come」であることは言うまでもなく、学習者が難しいと感じることも少ない。しかし実際にはその用法に若干の差異があり、学習時に母語が転移して誤りを引き起こす。例えば日本語では私が相手のほうへ移動することは「行く」で表し、相手が私のほうへ移動することは「来る」で表すが、英語ではどちらも come で表すのが普通である。その結果、相手のところへ今行くという動作を「*今、来ます。」としてしまう。こうした違いが生まれる理由は何であろうか。

(4) 受身表現

英語などでは受身表現は基本的にヴォイスの転換、すなわち「動作主からそれ以外への視点の移動」で説明できるが、日本語の場合、そうしたヴォイスの転換だけでは説明できない面がある。ヴォイスの転換による受身は直接受身であるが、日本語ではそれ以外に間接受身が存在しているからである。なにゆえ、日本語では間接受身が発達しているのか。また日本語の受身表現は、主語は人間などの有情物であることが多い、迷惑などの感情を表現することが多い、などの特徴がある。日本語の受身表現にこうした特徴があるのはなぜか、といった学習者の疑問にどう答えたらよいであろう。

これらの個々の問題についてはそれなりに回答を示すことができるかもしれない。しかしその説明に

一貫性がないとすれば、学習者はそれらを一つ一つ覚えなければならず、学習に要する負担は大きなものとなる。しかしその根底に言語類型論的な日本語の特徴があり、それらが日本語の個々の特徴を生み出しているのだとすれば、学習者が覚えなければならないことはそうした日本語の類型論的特徴だけで済み、学習負担は軽減される。そればかりか、そうした言語類型論的特徴はこれ以外のさまざまな日本語の特徴的な表現や用法に出くわしたときにそれを理解し、使えるようになり、習得していくヒントとなる可能性も期待できる。

本稿では認知言語学的観点を用い、日本語の言語類型論的な特徴（ここでは特に「把握のしかた」に対する言語類型論的特徴）について示すことで、上記の疑問に対し学習者にわかりやすく説明する方案を提示し、それにより、習得を促進することを目的としたものである。

2. 先行研究

これらの疑問については、大江（1975）、森田（2002）、久野（1978）など、日本語学の立場からいくつかの説明が試みられてきた。

大江（1975）は日本語の「行く・来る」や授受表現などに関し、英語との対照分析を行い、それを通じ、日本語が英語に比べ、一貫して「話し手があるできごとを外からではなく、その当事者として内から捉え経験するものとして描く」傾向の強い言語、言い換えれば「主観性への傾きの強い言語」であるとしている（pp. 9-11）。この研究では視点（視線の軸）を「あるできごとを、その当事者として、内部から主観的に眺める人の位置」と定義し、普通は話し手であるが、話し手に近い人となる場合もあるとしている。

大江（1975）の研究の優れた点は、個別的な対照研究を進める中で最終的に日本語の言語類型論的な特徴を導き出し、それにより個々の問題を一貫した観点から説明している点にある。しかしこの研究では、日英いずれの言語においても多少の差はあれ、主観性を帯びた表現が存在していることとらえ、日英両言語の類型論的特徴は「（主観性への）傾きの程度」の違いとだけ考えられており、両言語の「把握のしかた」に根本的な違いがあるといった考え方はしていない。なお大江（1975）は、日本語の授受動詞で give に相当する動詞が2つ（アゲル・クレル）あるのに、receive に相当する動詞が1つ（モラウ）しかなく、4項ではなく3項になることに関しては言及があり、「偶然の穴」であるとしつつも、「経済の観点からすれば合理的」とであると、やや一貫性に欠いた説明をしている（pp. 62-64）。

森田（2002）は、視点が日本語の様々な表現の使い分けに深く関わっており、日本語の理解には視点の分析が重要であると指摘した上で、日本語が「自己の視点」を中心としがちな言語であるとしている（p. 1）。そしてこのような視点が主語より述語を中心とする日本語を生み、その他さまざまな文法的特徴を生むとしている。ここで扱われている様々な文法的特徴には、本稿で扱う授受表現や「行く・来る」、受身表現のほか、使役表現（セル・サセル）、現状認識表現（テイル・テアル）、否定表現（ナイ）、確述表現（タ）、推量表現、条件表現、主題・主語、連体・連用修飾、動詞、形容詞、副詞、接続詞、指示語、格助詞、終助詞、文章展開など広範囲にわたっている。また日本語が自己の視点中心の言語であるのに対し、英語は「自己も対象化する言語」であるとしている。森田（2002）の研究は、日本語の類型論的特徴を理解する上でとても有益な示唆を多々含んでいるといえる。

久野（1978）は日本語を中心に、文法と密接に関わる視点的談話法の規則を体系的にまとめている。ここでは視点を「カメラ・アングル」としてとらえ、どのようなカメラ・アングルで見るとかを、「共感度（empathy）」という言葉で説明した。これによれば、文中のXに対する話し手の自己同一化を「共感」と呼び、共感度は客観描写を表す $E(x)=0$ から完全な自己同一化を表す $E(x)=1$ までの連続体であるという。またYよりX寄りの視点に立つことを $E(x) > E(y)$ と表した。授受動詞ではクレルが E （与格目的語） $> E$ （主語）、ヤルが E （主語） $\geq E$ （与格目的語）、モラウが E （主語） $> E$ （非主語）となる。また「行く・来る」については、話し手が動く主体でない場合、来ルが E （到達点側の人） $> E$ （動きの主体、出発点側の人）、行クが E （動きの主体、出発点側の人） $\geq E$ （到達点側の人）となる。受身文は能動文の主語の共感度が低くなり、新しい主語の共感度が高まり、 E （受身文の主語） $> E$ （もとの能動文の主語）となったものであるということになる。

久野（1978）で扱われている内容は広範囲にわたっており、本稿で扱う授受動詞、「行く・来る」、受身文のほか、相互動詞、主観表現、再帰代名詞などをとりあげ、導き出した談話法規則を駆使して説明を試みるとともに、日本語と英語のそれぞれの表現を対照し、その特徴を述べている。

これらの先行研究はどれも、授受表現や受身、「行く・来る」などについて、非常に詳細な分析と説

明を加えている。しかしながら上述の疑問のすべてを首尾一貫した観点から平易に説明できているとは言いがたく、それをそのまま学習者に説明しても容易に理解することは困難である。そのようなこともあって、日本語教育現場ではこれまで、学習者に用法の説明はできても、その理由までは十分に説明できておらず、細かな部分については各自の日本語の上達によって自ら理解できるようになることに委ねられていた。これらの疑問のすべてについて首尾一貫した観点から平易な形で示し、学習者に納得してもらい、習得を促進することはできないであろうか。

池上(2000)では、認知言語学的観点から、日本語の言語類型論的特徴を述べている。それによれば、日本語は「自己(一人称)を、他者を定位する原点としてとらえる傾向が強い言語」、あるいは「主観的把握が相対的に広い範囲で許容される言語」であるという。また、その上で行く・来ルやアゲル・モラウ、見エル・聞コエル・感覚形容詞などの感覚表現、嬉シイ・悲シイなどの感情表現などについて、「1人称への拘わり」に関して言及されている。例えば日本語の来ルは「1人称への移動」をさす、ヨーロッパ系の言語では「1、2人称への移動」をさす。また日本語では「1人称への授受」はクレルで表し、「2、3人称への授受(アゲル)」と区別する。感覚・感情表現では1人称だけ主語になり、2、3人称は主語にならない(疑問文は除く)などの現象を挙げている。

池上(2000)が提示した「把握の主観性」の観点は把握に関する日本語の類型論的特徴を明確にしている点で非常に有効で、これら学習者の疑問を平易に解決し、日本語教育に応用可能な観点となると考えた。そのため本稿ではこの観点をさらに発展させ、日本語教育への応用を試みる。具体的には日本語の「把握のしかた」の類型論的特徴をまず明らかにし、その違いが上述した様々な日本語の言語的特徴を生み出していると仮定して、上記の学習者の疑問にできるだけ平易に説明し、日本語の特徴に対する理解を促しつつ習得を図ることを目的としている。

3. 分析

視点に関しては、日本語に限らず、英語などの世界の言語で以下のような原則が一般に見られる。

① ヴォイスに関する原則(動作主>被動作主)

被動作主より動作主のほうに視点が置かれやすい。その結果、「動作主=主語」の能動文や「あげ手=主語」の授受表現が無標、「被動作主=主語」の受身文や「受け手=主語」の授受表現が有標となる。

② 人称に関する原則(1人称>2・3人称)

参与者に話し手が含まれる場合、話し手に視点が置かれやすい。

しかし①、②だけでは、上述した日本語の特徴について満足のいく説明ができない。ところが以下の

③、④を考慮に加えることで、その理由を容易に説明できるようになる。

③ 把握の主観性

④ 意味と形式の対応

以下、③と④について具体的に説明する。

3.1 把握の主観性

言語には「客観的把握」を基本とするものと「主観的把握」を基本とするものがある。このことは池上(2000)のほか、森田(2002)、森山(2004)でも詳しく述べられている。日本語は後者で、このことが日本語の様々な言語表現に影響を及ぼす。

これまでの視点や受身・授受表現などの研究では、いわゆる「視点」とここでいう「把握」のしかたを明確に区別することが少なかった。本稿ではこの点を明確に区別する。

把握のしかたに関しては、Langacker(1991:211)の「ステージ・モデル(stage model)」を援用する。これは認知主体としての人間が、世界をどのようにとらえ、言語化するかをモデル化したもので、図1のようなモデルである。

但し、このモデルでは、認知主体が事態を外からとらえており、英語のような「客観的把握」を主とする場合には問題ないが、日本語のように認知主体が世界を内からながめ、「主観的把握」をすることが多い場合にはモデルの修正が必要である。

この点についてはLangacker(1991:315-342)が「主体化(subjectification)」という形で取り上げている。しかしながらLangacker(1991)の議論は、「文法化(grammaticization)」の現象を説明するための前提として各種表現の主体性/客体性の議論はしているものの、把握に関する様々な言語の類型論的特徴には触れられていない。また日本語の「主観的把握」という言語類型論的特徴について、学習者にわかりやすく説明するのに適して

いるとも思われない。したがって本稿ではこの Langacker の「主体化」のモデルは用いず、その代わりに池上 (2000) の提示した「把握の主観性」に関する言語類型論的な考え方をステージ・モデルに適用し、修正を加えた上で、日本語教育に応用することにする。

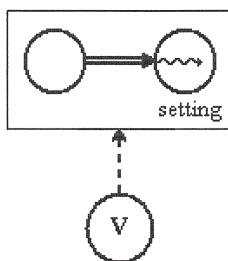


図1 ステージ・モデル

図1は認知主体が事態を外からとらえているため「客観的把握」の場合を表すとして、「主観的把握」の場合、このモデルをどのように修正したらよいであろうか。大江(1975)の言葉を借りれば、「主観的把握」とは「あるできごとを、その当事者として、内部から主観的にとらえる」ことである。

例えば、私という人間が遠くに富士山を見ている場合を考えてみよう。図2はそれを図示したもので、左が客観的把握、右が主観的把握をした場合である。英語では図2左のように、I が客観化され表現の対象となっており、「I see Mt. Fuji over there.」となり、図1のステージ・モデルと同じような把握の仕方となっている。しかし日本語では図2右のように、「私は(が)あそこに富士山を見る。」といった把握ではなく、私自身は表現の対象から外れて「あそこに富士山が見える。」と言語化されるのが普通である。このように英日両語間で把握のしかたが表現の差となって表れている。英語の表現では、富士山だけではなく私自身を客観的な表現の対象に含め、「私という存在が富士山という山を見ている」といった2つの参与者間の他動詞的な表現で描き出している。換言すれば、私とは別にもう一人の私(認知主体)を置き、その「認知主体としての私」が、「私が富士山を見ている」という事態を客観的に描くという表現になっている。これが「客観的把握」である。これに対し、日本語では私自身が認知主体となり、私の目に映ったままの情景を表現しているため、私自身は表現の対象から外れている(「私」が言語化されないのは表現の対象から外れているためである)。これが「主観的把握」である(図2右で「私」がステージのふちに描かれているが、これは認知主体の「私」が表現の範囲から外れて「富士山が見える」と表現することもできるが、表現の範囲に含めて「私には富士山が見える」と表現することもできることを示している)⁽¹⁾。

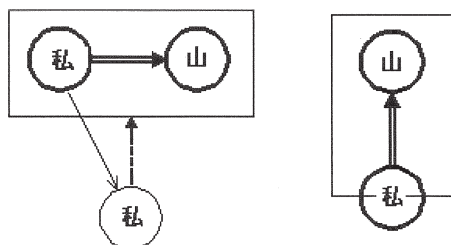


図2 「I see Mt. Fuji over there.」と「(私には)富士山が見える」の把握のしかたの違い

「把握の主観性」に関し先行研究を大別すると、①視点やヴォイスと把握とをひとまとめにして主観性を考え、「把握」の主観性については明確に区別して考えていないものと、②「把握」の主観性に関してはあまり問題にせず、「視点」のみを研究対象とするものいずれかであった。先ほど取り上げた先行研究で言えば、大江(1975)、森田(2002)は①に相当し、久野(1978)は②に相当する。しかしこれでは視点やヴォイスに関する日本語の特徴を学習者に明確に示せないため、本稿では日本語の有す

る「把握の主観性」を区別してまず取り上げ、日本語の類型論的特徴を明確にし、その上で視点やヴォイスの問題を扱うことにする。

3.2 意味と形式の対応

認知言語学によれば、言語は人間のカテゴリー化を反映している。人間は世界に存在する様々な事物を効率よく（経済性）記憶するため、カテゴリーを形成するが、このカテゴリーは人間が主観的に形成するものである。即ち人間が同じ意味を付与したものは同じカテゴリーにまとめられ、同じ形式（言語）が与えられ、異なった意味を付与したものは異なったカテゴリーにまとめられ、異なった形式（言語）を用いるのが普通である（Bolinger 1977）。

4. 具体的説明

(1) の授受表現における「ウチーソト」の対立や (2) の談話における固定的視点、(3) の様々な受身表現の特殊性などは①、②に加え、③を考慮に加えることにより、説明が可能になる。また (1) で日本語の授受動詞が 2 項や 4 項対立ではなく、3 項対立になる理由は①、②に加え、③、④を考慮に加えることにより説明が可能である。以下具体的に説明する。

4.1 授受表現

英語の授受表現は図 3 のように「客観的把握」でとらえる。授受を表す二重矢印 (⇒) の左側の○が話し手 (1 人称) である。図下の「私」は認知主体としての「私」を表し、四角は認知主体としての私の表現の範囲 (scope) を表す。英語では客観的把握の結果、1 人称の参加者を客観化しており、他の参加者と区別することがあまりないため、スコープ内の左側の参加者である 1 人称の「私」を他の参加者と同じく単に○で表現した。

(a) の場合、すなわち「話し手=あげ手」となる場合には、②の原則でも話し手に視点が向けられ、①の原則でも動作主 (あげ手) に視点が向けられるので、「話し手=あげ手」が主語になりこの動作は give で表現される (視点が向けられている○が太線になっている)。

(b) の場合、すなわち「話し手=受け手」となる場合には、①と②の原則に矛盾が生じるため、どちらかの原則が優先される。②の原則が優先されると、話し手に視点が向けられ、「話し手」が主語になり、動作は receive で表現されるが、①の原則が優先されると、(b') のように、動作主 (あげ手) に視点が向けられるので、「あげ手」が主語になり動作は give で表現される。

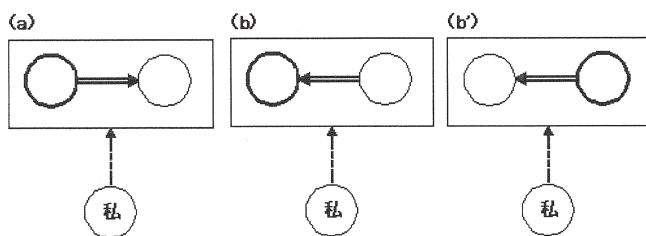


図 3 英語の授受表現

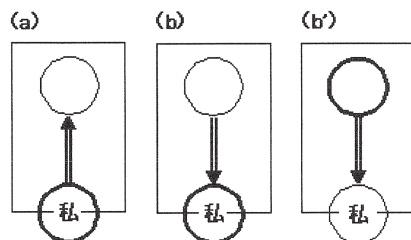


図 4 日本語の授受表現

これに対し日本語の授受表現は図 4 のように、「主観的把握」でとらえられる。(a) の「話し手=あげ手」の場合には、②の原則からも話し手に視点が向けられ、①の原則からも動作主 (あげ手) に視点が向けられるので、「話し手=あげ手」が主語になり動作は give で表現される。「相手=もらい手」が主語になって動作が receive で表現されることは、①、②のいずれの原則にも反するため、原則としてこうした視点はとりにくい。

(b) の「話し手=受け手」の場合には、①と②の原則に矛盾が生じるため、どちらかの原則が優先される。②の原則が優先されると、話し手に視点が向けられ、「話し手=もらい手」が主語になり、動作は receive で表現されるが、①の原則が優先されると、(b') のように、動作主 (あげ手) に視点が向けられるので「あげ手=相手」が主語になり動作は give で表現される。客観的把握では、私と他者と

は同じように客観化される結果、私と他者との区別はなく、その結果、図3の(a)と(b')とで、「認知主体としての私」からの見え(意味)はほぼ等しくなる(単に左右対称に過ぎない)ので、④の原則から、同じカテゴリーにまとめられ、同じ give という動詞を共有して用いてもよさそうである。ところが日本語では、図4で(a)と(b')とを比べると、「認知主体としての私」からの見え(意味)はあまりに異なっており、(a)ではモノが私から遠ざかり、(b')ではモノが私に近づいてくるような見えとなる。このように主観的把握の場合には、「私にとっての意味」が大きく異なることから、④の原則によって同じカテゴリーにまとめ、同じ動詞で表すことは問題が出てくる。以上から日本語では give という動作を表す動詞にアゲルとクレルとが必要になり、receive は(a)で「相手=もらい手」が主語になることは原則としてないために、モラウ1つで済むわけである。

このように日本語における把握の主観性を明確にすることで、何故 give に2つの動詞が必要なのか、なぜ receive は1つの動詞しかないのか、「私=あげ手、相手=もらい手」の場合になぜモラウが使えないのかなどが容易に説明できる。もちろん特殊な文脈においては「私=あげ手、相手=もらい手」でモラウが使われるが、これは大江(1975)も述べたようにカテゴリー化の経済性で説明がつく。

表1は日本語、英語、韓国語、中国語の4つの言語に関し、本稿で述べた視点の原則と授受動詞の種類との関係をまとめたものである。中国語では授受動詞は give に相当する「給」1つで足りるが、これは視点に関し、原則①のみが関与しているためであること、英語、韓国語では授受動詞は2つあるが、これは原則①、②が関与しているためであること、日本語では授受動詞が3つ必要なのは、原則①、②に加え③が関与しているためであることがこの表からよくわかる。

表1 日本語、英語、韓国語、中国語の視点の原則と授受動詞の関係

	日本語	英語	韓国語	中国語
原則③	○ (主観的)	× (客観的)	× (客観的)	× (客観的)
原則②	○	○	○	×
原則①	○	○	○	○
動詞の種類	あげる、もらう、くれる	give、receive	주다、받다	給

4.2 談話における固定的視点

さらに談話レベルで考えると、視点の原則はもう一つ加わる。

⑤視点の固定: 視点はできるだけ固定させ、移動させない。

英語のように客観的把握の言語では、②の1人称優先の原則はあるものの、客観的把握であるためにすべての参加者が対等に扱われる傾向が出てくる。そしてこのように②の原則の支配が相対的に弱まれば、①の動作主優先の原則の支配が相対的に強まる結果となり、視点は動作主から動作主へと移動する傾向が出てくる。このためどの視点からながめるかという点に関しては、話し手、または話し手が気持ち寄せた人物が相対的に多くなることはあっても、それに固定されることは少なくなり、視点は動作主が変わればそれに応じて変わるようになる。

これに対し、日本語のように「話し手の見え」を重視する主観的把握型の言語では、どの視点からながめるかという点においては、特別な理由がない限り、話し手(または話し手が心を寄せた人物)となり、①の原則が非常に強くなり、視点が固定される傾向が強まる。

4.3 「行く・来る」と「go・come」

「行く・来る」と「go・come」の用法の違いに関しても同様な説明が可能である。日本語は話し手中心の主観的把握を基本とする言語であり、動詞「行く・来る」には話し手の視点が内包されている。

行く: 話し手(または話し手が視点を置いている場所)から遠ざかる移動

来る: 話し手(または話し手が視点を置いている場所)に近づく移動

(1)は話し手の領域から遠ざかる移動であるため「行く」が用いられている。

また(2)では、話し手の視点が、相手(聞き手)の家に置かれており、そこに近づく移動であるため、「来る」が用いられる。(3)(4)は空間的な移動ではなく、時間的な移動が問題になっている。時間的な移動では、過去から現在への変化は、話し手に近づく移動であるので、「てくる」が用いられ、現在から未来への変化は、話し手から遠ざかる移動であるので、「ていく」が用いられる。もちろん、この場合に

も、(話し手の) 視点を1年前の時点におけば、(5)のように過去から現在への変化は、話し手が視点を置いている時点=1年前) から遠ざかるので、「ていく」を用いることができる。

- (1) 明日君の家に行ってもいい？
- (2) 明日君の家に、だれか来るの？
- (3) 最近、だんだん物忘れが激しくなってきた。
- (4) これから、僕の運命はどうなっていくのだろう。
- (5) 1年前から、ぼくはだんだん太っていった。

次に、日本語の「行く・来る」と英語の「go・come」の用法の違いがなぜ生じるのかを、上の把握の主観性の観点から述べてみたい。日本語は話し手中心の主観的把握を基本とする言語であり、動詞「行く・来る」には話し手の視点が内包されていることは既に述べたが、英語の場合には、客観的把握を基本とするため、「go・come」の使い分けにも「行く・来る」と違いが出てきている。

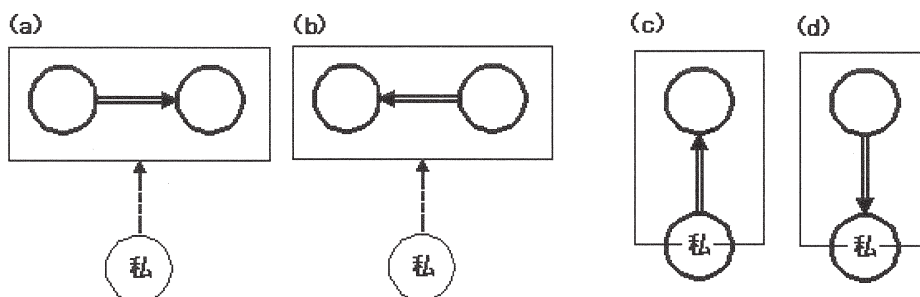


図5 英語の「go・come」と日本語の「行く・来る」

(a)、(b)が英語、(c)、(d)が日本語の場合である。(a)、(b)で左が私、右が相手を指すが、客観的把握では、私も相手も客観化(3人称化)され、その結果、私と相手とは対等な参加者と見なされることから、同じ白丸で表されている。(a)、(c)は私が相手(2人称)のほうへ向かう動作で、(b)、(d)は逆に相手(2人称)が私のほうへ向かう動作である。日本語では(c)は行く、(d)は来ると使い分けられるが、英語では(a)、(b)どちらも come である。この理由は、図5のように、客観的把握と主観的把握を区別して書いた図で見ると一目瞭然である。英語のように客観的把握をした場合には、私も相手も対等な参加者として扱われ、そうなる認知主体としての第2の私からの見えは、(a)と(b)で鏡像(左右対称)のようにほとんど同じもの(接近的移動)として把握される。これに対し、主観的把握をした場合には、認知主体としての私からの見えは、(c)では「私から」の外向きの矢印、(d)では「私へ」の内向きの矢印と、全く逆の意味合いを示している。同じものとして把握される英語では同じ動詞(come)で表しても問題ないが、私にとって反対のものとして把握される日本語では、同じ動詞では表しにくく、反対の意味を持つ「行く・来る」で区別されるわけである。

英語の「go・come」は客観的把握、日本語の「行く・来る」は主観的把握と述べたが、これは厳密に言うと、図6のように、英語では1人称と2人称が対等に扱われた結果、第3の視点が選ばれ客観的把握となり、日本語ではそうでなくあくまで話し手としての1人称中心であるため主観的把握となったのである(池上 2000)。したがって英語の場合には、「go・come」の使い分けは、

- go : 1・2人称の領域から遠ざかる移動
 come : 1・2人称の領域に近づく移動

という形で行われる。1人称が2人称へ近づく移動、またはその逆の移動は、上のどちらにも属さないが、英語では1・2人称の領域に近づく移動に準ずるものと考えられ、主に come が用いられるのである。

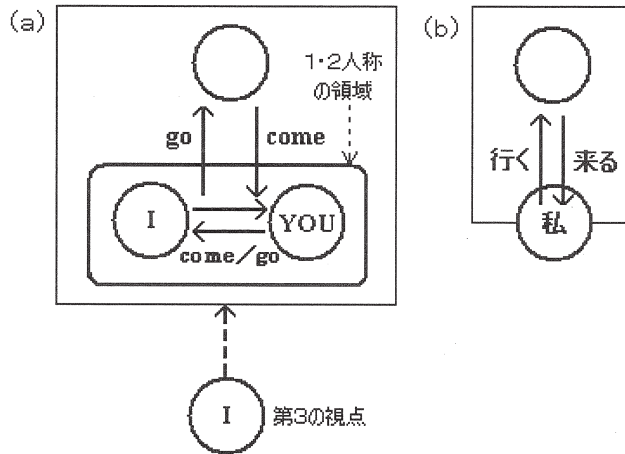


図6 英語の「go・come」と日本語の「行く・来る」の使い分け

4.4 受身表現

受身表現に関しても、把握の主観性の違いを明確にした上で説明することにより、日本語の特徴に対する疑問に容易に答えることが可能となる。他動性の違いについても容易に説明できる。

図7で左が英語の場合で、右が日本語の場合である。

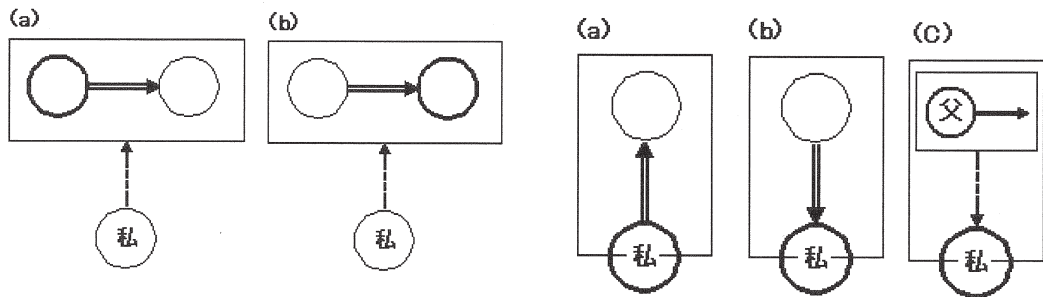


図7 英語の受身表現と日本語の受身表現

英語では (a)が動作主に視点が置かれた無標の場合で、動作主が主語で表されて能動文（他動詞文）となり、(b)が被動作主に視点が置かれた有標の場合で、被動作主が主語で表されて受身文（直接受身）となる、英語は原則①のみで説明が可能である。

一方日本語では、(a)が能動文、(b)が受動文、(c)が間接受身（例：父に死なれた。）である。日本語の受身文では有情の受身が多いが、これらは (b)のように「日本語の受身は私が被る事態を表す言語表現」であることで説明できる。つまり主語は私か私のような有情の存在となる可能性が高くなるのである。また日本語の受身文では「迷惑の感情」を伴うことが多いことも、日本語の受身が「私が被る事態を表す言語表現」であり、私が何らかの事態を被れば必然的に私に何らかの（迷惑の）感情が生じることから説明できる。さらに日本語には間接受身があるが、これは (c)のように私に直接関係のない事態であっても、間接的に私が被害を感じることはありうるわけで、その場合には新たに私が参与者に加わり、事態からの被害を感情も含めて受身で表すことになると説明できる。

さらに (a)より、日本語の他動詞文では、動作主が人などの有情物の場合が多いことや、英語とは異なり、被動作主の状態変化を必ずしも含意していないこと（燃やしたけど燃えなかった。）などがこの図により容易に説明できる。つまり日本語では他動詞文も主語は私か私のような有情の存在であることを基本としているのであり、他動的な動作の結果は、他者に関するものであり、私の外で起こるものであるため、動作主（話し手）の立場からはその結果まで何とも言うことができないわけである。

なお日本語の「非情の受身」は、例えばモノ同士の動力連鎖のように、認知主体の私とは無関係に起

きる二者間の事態について中立的視点から述べたもので、英語の受身(b)に似ている(金水 1992)。

5. まとめ

本稿では認知言語学的観点を用いて、日本語の「把握のしかた」に関する言語類型論的特徴を示した上で、その観点から日本語の授受表現、「行く・来る」、受身表現など、ヴォイスや視点の関わる表現に関し、学習者にわかりやすく説明する方案を提示し、それにより、日本語の習得を促進する可能性について考察した。

視点に関する研究は、大江(1975)、久野(1978)を筆頭に優れた先行研究が存在している。さらに、森田の一連の研究は、自己中心的な視点を類型論的特徴とする日本語の特徴を明確化した。しかしながら大江、久野との研究を取り込み、発展的に統合するところまではいかなかった。

これに対し、認知言語学では言語に人間の認知が深く関わっていることを認めた上で、パースペクティブを重視し、表現にパースペクティブが深く関わっていることを示した。またパースペクティブにもいわゆる視点の問題から、プロフィールとベース(profile on a base)、具体化のレベル(level of specificity)、スケール(scale)とスコープ(scope)、そして把握の主観性(subjectivity)に至るまで、幅広いパースペクティブを「人間の認知のしかたの多様性」という観点から一つにまとめることに成功した(Langacker 1991)。本稿ではこのような認知言語学的観点を援用し、また池上(2000)の認知言語学的観点からの日本語論を起点とすることで、今までたどり着くことができなかった視点や把握の主観性の融合を行い、日本語を母語としない学習者に簡潔に説明する方案を示した。さらに認知言語学は、意味やカテゴリーといったものも人間との関わりの中で見つけ、同じ意味づけをしたモノは同じカテゴリーに、異なる意味づけをしたモノは別のカテゴリーにまとめるといったカテゴリー観をとっている。この観点が、なにゆえ英語では give 1 つで表す事態を日本語では 2 つのカテゴリー(意味)に分け、2 つの動詞で表すのか、英語では come で表すところをなにゆえ日本語では「行く」で表すのかといった疑問を、これまでよりいっそう明快に説明することができるようになった(本稿で扱った視点やヴォイスに関する授受表現、行く・来る、受身表現などの説明の一部は、日本語教師向けに執筆された森山(2007)で実際に用いられており、日本語教育現場に活用されている)。

このように認知言語学的観点は、今後言語教育といった応用言語学の側面にも貢献しうるといえる。しかし本稿で取り上げたような主観的な「把握のしかた」が関わっている日本語表現は、森田(2002)が列挙しているように、他にもまだまだあると思われる。今後、研究の範囲をさらに広げ、できるだけ日本語教育で扱う文法項目全般を網羅できるようにし、その上で、その成果を日本語教育の教授法や教材開発へ活用できればと思っている。

注

- (1) 動作主が 3 人称の場合には、当然のことながら、英語も日本語も、客観的把握になる。しかし「主観的把握」型の日本語の場合には、登場人物のだれかに感情移入(共感)して表現されることが少なくない。例えば、川端康成の『雪国』の有名な冒頭の文、「国境の長いトンネルを抜けると雪国だった。」という表現は、3 人称の主人公の視点から描いた表現である。この英訳、ドイツ語訳ではトンネルを抜け出る列車が主語になっている(池上 2000)。このように主観的把握型の日本語は、3 人称が主語の場合にも、主観的把握を行うことが英語に比べて多くなっている。図で表すと図 8 (右)のようになる。その結果、図 2 右と同じようなアングルになる。

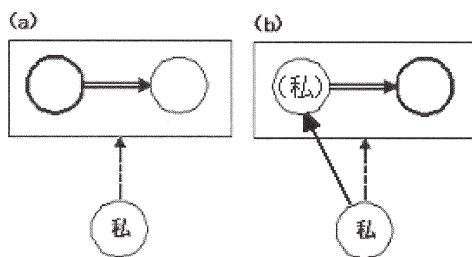


図 8 3 人称による客観的な事態と「主観的把握」の日本語でよく見られる感情移入

<参考文献>

- 池上嘉彦(2000)『日本語論への招待』、講談社。
大江三郎(1975)『日英語の比較研究—主観性をめぐって』、南雲堂。
金慶珠(2001)「談話構成における母語話者と学習者の視点—日韓量言語における主語と動詞の使い方を中心に—」『日本語教育』109:60-69、日本語教育学会。
金水敏(1992)「場面と視点」『日本語学』11-9:12-19、明治書院。
久野暲(1978)『談話の文法』、大修館書店。
田代ひとみ(1995)「中・上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」『日本語教育』85:25-37。
渡邊亜子(1996)『中・上級日本語学習者の談話展開』、くろしお出版。
森田良行(2002)『日本語文法の発想』、ひつじ書房。
森山新(2004)「認知主体の把握のしかたと格助詞ニの多義構造」『日本学報』59:89-102、韓国日本学会。
森山新(2007)「第17章 日本語の文法」佐々木泰子編『ベーシック日本語教育』、ひつじ書房。
Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and form*. London: Longman.
Langacker, Ronald. W. (1991) *Concept, image, and symbol. The Cognitive Bases of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruiter.

*本研究は平成 17~19 年度科学研究費補助金研究「認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究」(基盤研究 C、課題番号 17520253、研究代表者: 森山新) により行われている。科研報告書など、詳しくは、<<http://jsl.li.ocha.ac.jp/morishin1003/ninchi-kaken2.htm>>を参照のこと。

<Abstract>

A tentative on Japanese language education from the applied cognitive linguistic approach

MORIYAMA, Shin

Ochanomizu University

In this paper I demonstrated the language typological-feature with regard to the Japanese “perspective” using a cognitive linguistics viewpoint.

Moreover, I presented methods which easily explained the use of expressions such as inflection with which voice and viewpoints are concerned; for example, transfer, “go/come”, and passive expressions.

As the precedence researches which dealt with a viewpoint, there are Oe (1975), Kuno (1978), etc. Furthermore, a series of research conducted by Morita clarified the typological feature within the Japanese language, characterized by egocentric viewpoints.

However, his research was not able to be expansively associated with the research of Oe and Kuno. On the other hand, cognitive linguistics admits that language is deeply associated with man's cognitive ability. It accepts the importance of perspective and it shows that expressions within language have deep relationships with perspective.

In this paper I united the viewpoint and cognitive subjectivity, which went unnoticed until now, using cognitive linguistics viewpoints and starting from Ikegami's (2000) theory regarding the Japanese language.

This has demonstrated teaching methods which easily express alternative learning styles to non-native students learning Japanese. Furthermore, cognitive linguistics also emphasizes items such as meaning and category with relation to human beings. Additionally, cognitive linguistics has a categorical view which emphasizes that things that share similarities in meaning should be categorized into a group; thus things which do not share similarities in meaning should not be categorized into a group.

This viewpoint expresses more coherently in understanding questions which arise in Japanese such as, “Why does Japanese have two verbs ‘ageru’ and ‘kureru’ whereas English uses a single verb ‘give’?” Or, “why does the verb ‘iku (go)’when used in Japanese share similar positioning during situational events such as the verb ‘come’ in English?”

My explanations introduced in this paper are used in various teaching materials used by Japanese educators and are beginning to be utilized within the Japanese educational language programs.

Thus, viewpoints of cognitive linguistics can also contribute to applied cognitive linguistics, especially within Japanese educational language programs.

However, as Morita (2002) expressed, there seems to be many more Japanese expressions demonstrating a subjective perspective. In the future, I will extend the range of my research to include items which are largely treated in Japanese educational language programs. My desire is that these results will be utilized within the various teaching methods and development of Japanese teaching materials.